

巻物と西鶴：近世写本文化の一例

レカ ラドゥ

日本文学史上の井原西鶴は浮世草子作家として大きな存在感をもっている。ただし、西鶴は連歌、散文、演劇の様々なフォーマット（短冊、色紙、袋綴本、巻物）で制作したことがある。急速に発展している印刷文化の中で伝統的な写本フォーマットは再評価されたのか。この問題に答えるために、ハイデルベルク大学での「実質的テキスト文化」研究プロジェクトの一部として開発されたアプローチを使用する。それは実質的特性、生産と使用のトポロジー、そして物としてのテキストの社会的実践を分析するものである。

この研究の一部としては、西鶴の活動を当時の写本文化の中に位置付ける課題を調査している。本発表ではその一例として西鶴は写本文化の代表的なフォーマットである巻物をどのように扱ったかということに焦点を当てたい。第一と第二に、西鶴は絵巻の所有者と利用者であった。例えば、『梵天国』の奈良絵本の絵巻を持ち、その内容を『諸艶大鏡』に使用したことがある。また、テキストとしてだけでなく、物としての巻物も西鶴作品で活躍している。例えば、同じ『諸艶大鏡』初頭の文章と挿絵では、世之介の息子が女護島の美面鳥より好色の秘伝の巻を受け取る。刊本作品における例であるが、この例は写本文化の持久力を証明している。第三、西鶴は絵巻の編集者であった。例えば、浅野秀剛氏によると天理図書館蔵の『西鶴独吟百韻自註絵巻』では、狩野派の絵師が西鶴の下絵に従って清書した絵を整えたものである。

所有者・利用者・編集者として西鶴は多角的に巻物を扱い、当時の写本文化の中で活発な活動を行った。このように西鶴のイメージを再考しながら江戸時代における刊本と写本の相互作用をより深く理解できるようになる。

Saikaku and Handscrolls: An Example of Early Modern Manuscript Culture in Japan

Leca Radu

In the history of Japanese literature, Ihara Saikaku holds a prominent place as an author of *ukiyo-zōshi* novels. However, Saikaku also wrote linked-verse poetry, essays, plays, and actor critiques, which were produced in a variety of formats (poem slips, poem cards, *fukuro-toji* books, handscrolls, etc.). That diversity of formats allows one to address the general question: did manuscript formats undergo a re-evaluation amidst a rapidly expanding printing culture at the time? To answer this, I apply the approach developed within the “Material Text Cultures” research project at Heidelberg University. This consists of an analysis of the material characteristics, the topology of production, and the use of texts as material objects engaged in social practices.

As a member of that research project, I am surveying the significance of Saikaku’s written output within the manuscript culture of late seventeenth-century Japan. In this paper I focus on one aspect of that topic, namely the ways in which Saikaku’s work intersects with the representative manuscript format of the handscroll. Saikaku was both an owner and user of handscrolls. For example, he owned an illustrated handscroll of the popular tale *The Land of Brahma*, and adapted some of its textual contents as an episode in his second novel. Beyond textual adaptation, handscrolls as objects often feature in Saikaku’s works, as for instance in the opening to his second novel where the protagonist receives a handscroll with secret teachings on the Art of Love from a messenger from the Island of Women. Although this example appears in a printed book, it testifies to the enduring relevance of manuscript culture. Moreover, Saikaku was also a producer of handscrolls: for example—as recently pointed out by Asano Shūgo in his essay in the recent volume of reproductions of Saikaku’s manuscripts from Tenri University Library—the “Handscroll with One Hundred Verses by Saikaku Annotated by Himself” was illustrated by an artist trained in Kanō school techniques based on Saikaku’s own sketches.

Therefore, as an owner, user, and producer of handscrolls, Saikaku was an active participant in the manuscript culture of his time. While reassessing Saikaku’s image within literary studies, this paper enables a better understanding of the interrelationship between manuscript and print cultures in seventeenth-century Japan.

日本文学史の中で井原西鶴は浮世草子作家として大きな存在感を持っている。ただし、西鶴は連歌、散文、演劇などの様々なフォーマット（短冊、色紙、袋綴本、巻物）で制作したことがある。急速に発展している印刷文化の中で伝統的な写本フォーマットは再評価されたのか？それに答えるために、ハイデルベルク大学での「実質的テキスト文化」研究プロジェクトの一部として開発されたアプローチを使用する。それは実質的特性、生産と使用のトポロジー、そして物としてのテキストの社会的実践を分析するものである。

その研究の一部としては、西鶴の活動を当時の写本文化の中に位置付ける課題を調査している。本発表ではその一例として西鶴は写本文化の代表的なフォーマットである巻物をどのように扱ったかということに焦点を当てたい。第一と第二に、西鶴は絵巻の所有者であり、利用者であった。例えば、『梵天国』の一つの絵巻の最後に西鶴の印鑑がある〔横山重『室町物語集2』四七三頁〕。その内容は『諸艶大鏡』1-2に使用されている：「はや島原の門さしは、いつの事と申。鬼の島にあるとや、千里飛車もかな。目ふる間行べき物をといふ。とてもならぬ願ひ、若その車があるにしてから、飛び過て、淀鳥羽のあたりに落ちなば、今宵の役には立まじ。」〔『新編西鶴全集1』一八九頁〕。読者が梵天国王の姫君が羅刹国より逃げ出す「千里飛車」というディテールを差し入れ、読者の事前知識として扱われている。近世の写本と刊本文化が密接に繋がった一つの例である。



図1 長崎貿易の代表としての絹の巻物。

『日本永代蔵』5-1

画像: 早稲田大学図書館
古典籍総合データベース

また、テキストとしてだけではなく、物としての巻物も西鶴作品では活躍している。まず、商品としての巻物が日本永代蔵 5-1 の長崎の描写の文章と挿絵に見える：「秋船の入ての有さま、糸巻物、薬物、鮫、伽羅、諸道具の入れ札」〔『新編西鶴全集 3』一九五頁〕。『人倫訓蒙図彙』の挿絵で見えるように長崎で輸入された絹の巻物が誰でも唐物屋から手に入れられたのである。

巻物の社会的実践の面から『本朝桜陰比事』1-1 の話には「六代の先祖是を作りたる家業のまき物さしあげしに」〔『新編西鶴全集 3』六〇三頁〕という例がある。ここでは、巻物は裁判の証拠であるとともに家の継続とアイデンティティを具現化するモチーフである。同様に、西鶴の浄瑠璃『凱陣八島』では謡曲『安宅』と『義経記』の勧進帳読み上げもどきのシーンがある：「もとよりくはんじん帳の有ばこそ、わうらいのまき物取出し、くはんじん帳と名付、たからかにこそよみあげけれ。」〔『新編西鶴全集 5 下』一二三四頁〕。伝統的な証拠としての巻物の役割に加えて往来物という当代の使い慣れたメディアを以って笑わせる。さらに、信田純一氏によると当時の「大仏修復並びに大仏殿建立の勧進」というニュースへのヒントも含まれている。つまり、刊行された作品では、西鶴は写本文化における巻物の実質的認識と伝統的な役割を活用しながらアップデートしている。

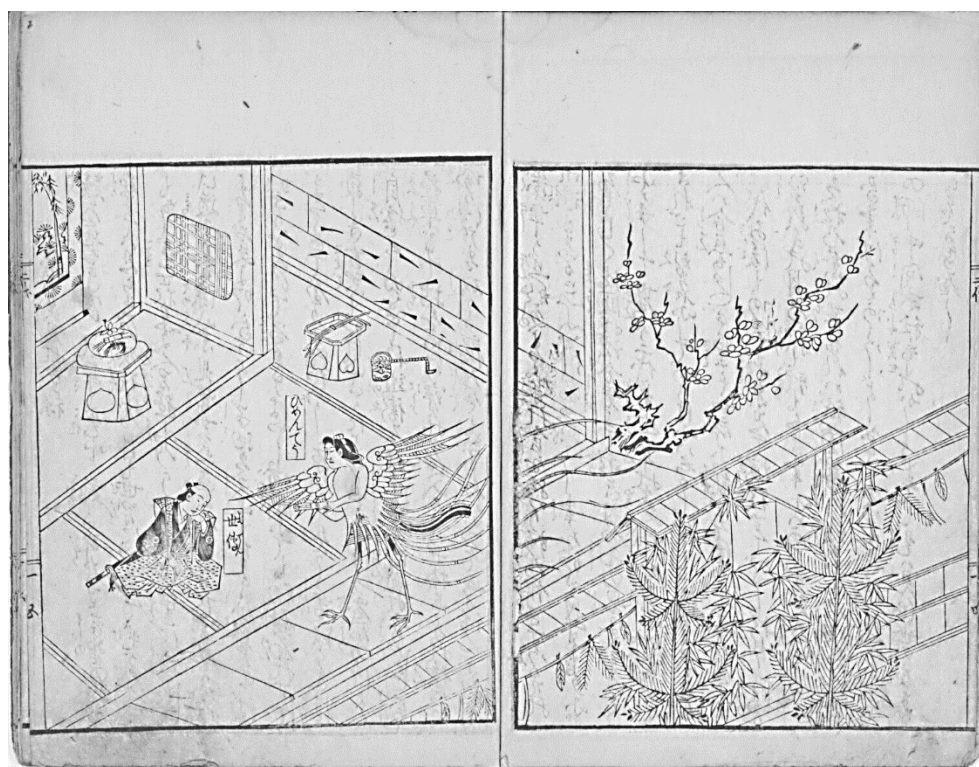


図2 浮世的な秘伝の
巻物の伝授場面

『諸艶大鏡』1-1

画像：京都大学貴重資料
デジタルアーカイブ

その現象のもっとも目に立つ例は同じ『諸艶大鏡』1-1におけるものである。その文章と挿絵では世之介の息子が女護島の配達人より秘伝の巻を受け取る：「是は女護国に住む美面鳥なり。御身の父世之介まれに彼地に渡り給ひ、女王と玉殿の御かたらひあさからず、二度かへし給はぬなり。されば親子の契りふかく、色道の秘伝を譲り給ふと一つの巻物左の袂になげ入る」〔『新編西鶴全集1』一八一頁〕。このシーンはお伽草子『御曹司嶋渡り』等における義経が捜索している蝦夷が島の大王秘蔵の兵法書秘伝の巻を思い起こさせる。刊本における例であるが、写本文化の持久力を証明している。

第三に、西鶴は絵巻の編集者であった。例えば、美術史専門家浅野秀剛氏によると天理図書館蔵の『西鶴独吟百韻自註絵巻』は、狩野派の絵師が西鶴の下絵に従って清書した絵を整えたものである〔「西鶴独吟百韻自註絵巻の絵をめぐる」『刊週読書人』令和2年10月9日〕。つまり、絵巻というフォーマットの特徴と聴衆者の期待をよく理解した上でその製作をコーディネートしたわけである。是は西鶴の編集活動の好例である。他に自力で文章・絵・大阪の仲間より出版した『哥仙大坂俳諧師』・『古今俳諧師手鑑』・『好色一代男』などがあり、他者が編集した文章に絵で貢献した『山海集』・『俳諧百人一句難波色紙』・『俳諧三ヶ津』・『高名集』・『俳諧女哥仙』などもあり、また自分の浮世草子にプロのイラストデザイナーであった吉田半兵衛・蒔繪師源三郎・菱川師宣の絵を施したものがある。その作品は西鶴という作者に当てはめるよりも、製作過程の面から考えると共同製作に近いといえるのではないか。

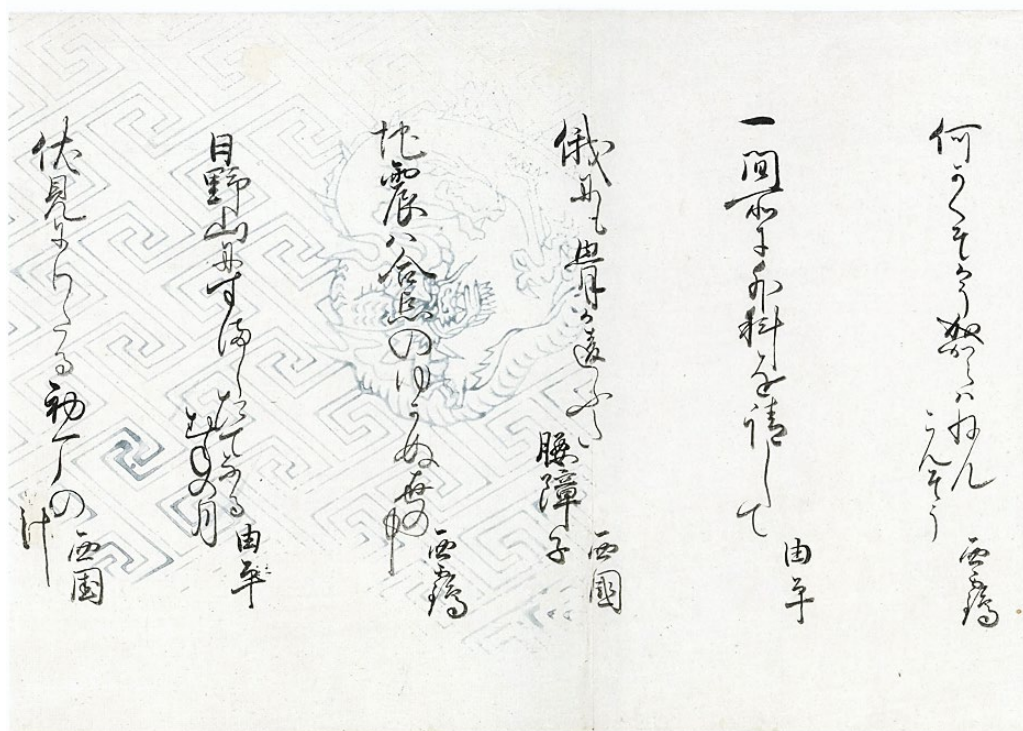


図3 共同製作
としての巻物

『胴骨三百韻』

画像: 天理大学附属天理図書館編
『西鶴自筆本集』

西鶴の本来の活動では、談林俳諧の仲間を通して物としてのテキストが作られ、その仲間が第一鑑賞者として想定された。その共同的な活動の好例は延宝6年『胴骨三百韻』なのである。中村西國が西鶴・西國・由平の俳諧を各百韻選び、さらに西鶴が序を施し、1367.8センチの巻物が成り立った。その目的は西国の里帰りのお土産であって、つまりこの巻物を以って談林俳諧の仲間の社会的関係を受け継いだといえる。用紙としては河童刷りの毘沙門格子巻龍空色地紋布目雲母引の間似合紙が使用されている。河童刷りとは印刷技術の一つであるとともに、西國の奥書に「及大阪判屋望申二付、あつさにちりはむる者成」とあり、天和・貞享二年刊各書籍目録に「一 胴骨」、阿誰軒俳諧書籍目録にも「胴骨一冊 西國 由平 西鶴作」とある。つまり、西鶴の刊本製作の背景には巻物等から成り立つ写本文化の活動力があつた。

所有者・利用者・編集者として西鶴が多様に巻物を扱い、当時の写本文化の中において活発な活動を行った。このように西鶴のイメージを再考しながら江戸時代における刊本と写本の相互作用をより深く理解できるようになるのを今後の課題としたい。